

広がる学力格差への 多様な取り組み

多くの学校で課題となっている「学力格差の拡大」だが、

『VIEW21』の読者モニターの先生方からも

「大変な課題だが、学校が正対して取り組むべきこと」

「確かな学力がますます必要とされている。」

「中位層も含めて、低学力層をいかに底上げするかが課題」

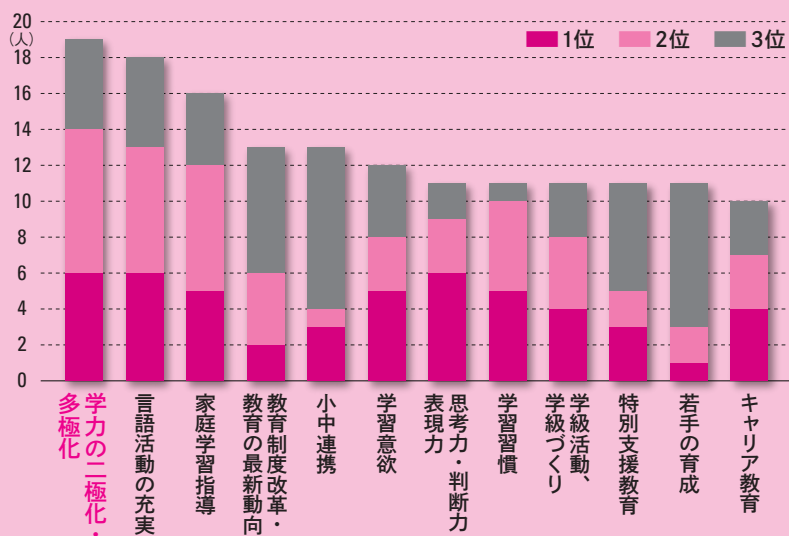
といった声が寄せられている。

今号では、広がる学力格差にどのように対応すればよいのか、

さまざまな観点で取り組む学校事例を基に追究する。

特集テーマ希望の1位は「学力の二極化・多極化」

Q. 『VIEW21』で扱ってほしい特集テーマをお聞かせください

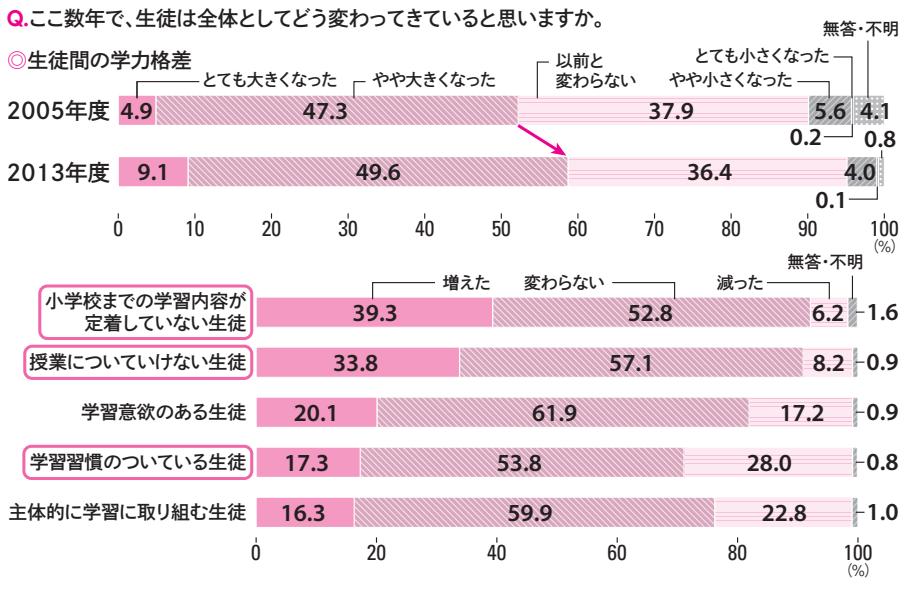


*41のテーマの中から、上位3つまでを選択して回答。10票以上あったテーマのみ抜粋
出典／『VIEW21 中学版』読者モニターアンケート（2013年11月実施。回答数82）

学力格差拡大の実態と課題

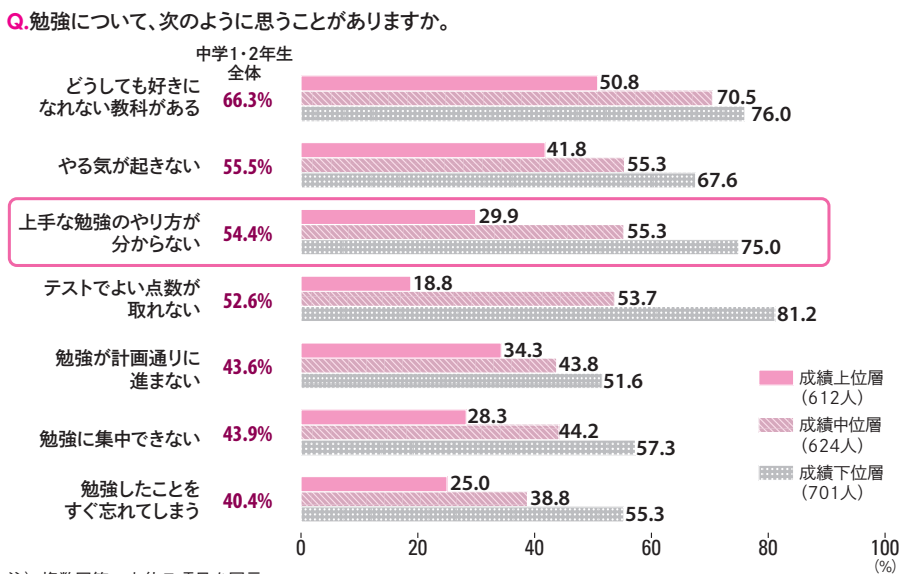
ひと口に「学力格差の拡大」といっても、さまざまな要因がある。ベネッセ教育総合研究所の調査結果を通して、学力格差の実態と課題を整理した。

図1 「学力格差は大きくなった」という回答が約6割に増加



「ここ数年で、生徒間の学力格差が大きくなった」と感じている教員は、2005年度に比べて6.5ポイント増え、58.7%となった。「小学校までの学習内容が定着していない生徒」や「授業についていけない生徒」が「増えた」と感じている教員が、それぞれ39.3%、33.8%もいることが背景にあるといえよう。更に、「学習習慣のついている生徒」が「減った」と感じている教員が28.0%に上っていることも、着目すべきだろう。

図2 学習上の悩みで、成績別の差が大きいのは、「上手な勉強のやり方が分からない」



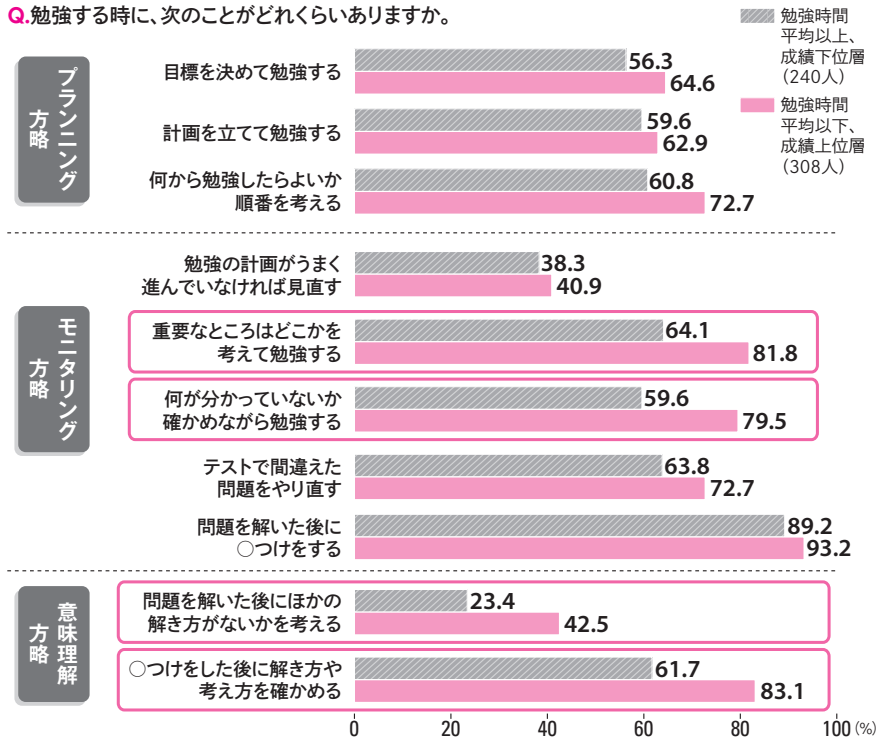
注) 複数回答。上位7項目を図示

学習上の悩みを成績層別に見ていくと、上位層と下位層で最も差が開いているのは「テストでよい点数が取れない」であり、次いで「上手な勉強のやり方が分からない」だった。勉強方法が分からないことが、「勉強が計画通りに進まない」「勉強したことをすぐ忘れてしまう」にも影響している可能性がある。下位層の学力底上げには、勉強の仕方を指導することも重要といえそうだ。

広がる学力格差への多様な取り組み

図3 「効率的に勉強する子」ほど、意味を考えながら効果的に学習している

Q.勉強する時に、次のことがどれくらいありますか。



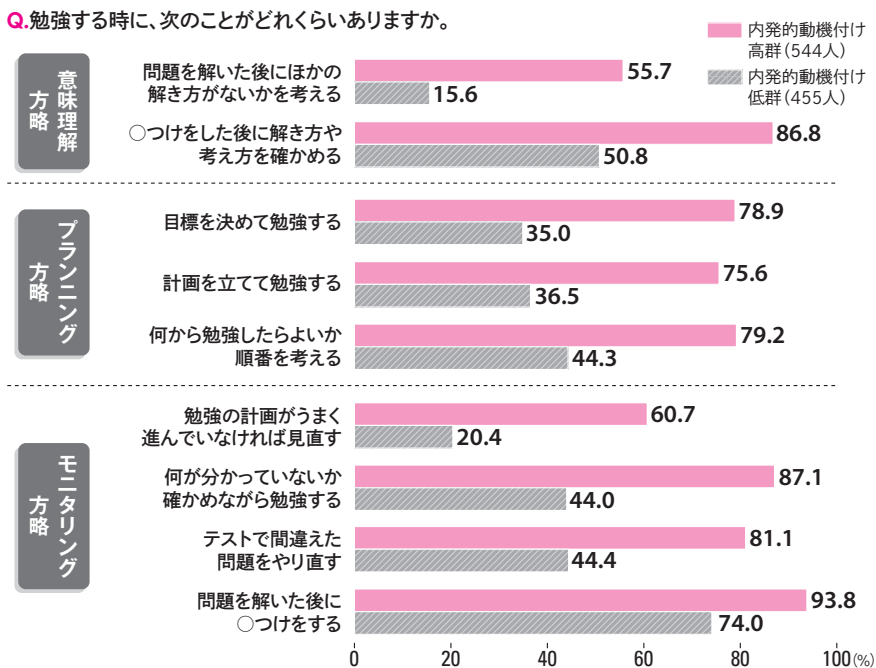
注1) 「よく」+「ときどき」あるの% 注2) 中学1・2年生の合計値

学習時間が平均より短くても成績が上位層の子どもと、学習時間が平均より長くても成績が下位層の子どもとで、学習方法を比較すると、15ポイント以上の差が見られたのは、「意味理解方略」の2項目と、「モニタリング方略」の2項目だった。この4項目を見ると、上位層の子どもほど「重要などころを考える」「分かっていない点を確認する」「他の解き方を考える」「○付けをした後に考え方を確かめる」と、学習内容の意味と、自分がきちんと理解しているかいないかを自ら確認しながら学習を進めている様子が見える。

学習時間(量)はもちろん大切だが、「学習方略」をきちんと身に付けることも重要であると示している。

図4 「内発的動機付け」が高い子どもは、さまざまな学習方略を取り入れている

Q.勉強する時に、次のことがどれくらいありますか。



注1) 「勉強の理由」の内発的動機付けを尋ねている3つの質問項目から総得点を算出し、内発的動機付け「高群」「中群」「低群」と3分割した。図は中群を除いて示している 注2) 「よく」+「ときどき」あるの% 注3) 中学1・2年生の合計値

学習の動機付けの高低によっても、用いる学習方略の比率に違いが見られる。

内発的動機付け(内容に対する好奇心や関心によってもたらされる動機付け)が高い子どもは、いずれの方略も使用率が高く、さまざまな学習方略を取り入れて勉強している様子が見える。更に、内発的動機付けが低い子どもとの差も大きい。自ら学ぼうとする意欲がなければ、自分に合った学習方法を試そう、使おうとする気持ちが起きにくい。学習の中で子どもたちの関心や好奇心を引き出すことは、学習の量と質にプラスの影響を与え、学力向上につながるという。

学校段階が上がるにつれて、学ぶこと自体の楽しさ、新しいことを知るうれしさといった「内発的動機付け」は弱まる傾向が見られる。いかにそれを食い止めるか。本質的に問い続けなければならない課題でもある。

図1 出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2013」(2013年4~7月実施。全国の中学校の主幹教諭・教務主任3,475人)
 図2~4 出典/ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」(2014年2~3月実施。全国の小学4年生~中学2年生とその保護者。親子で各5,409人)
 ※関連データの掲載は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトに2014年10月中を予定